

## 「あらかすいとなみ」とkioku手芸館「たんす」について

現在、さまざまな地域で芸術祭やアートイベントが開催され、美術館の外で作品を鑑賞したり、参加型の作品体験を楽しんだりすることが一般化しつつあります。そのような体験においては、相互のコミュニケーションが生じたり、展示場所の歴史や風土が影響を与えたりすることで、より身体的かつ感覚的な影響をもたらすことがあります。さらに近年では、特定の地域やコミュニティに根差した継続的な活動が注目され、アーティスト主導の作品制作に留まらず、状況の変化に対応し続ける終わりのない活動としてのアートが広がりを見せています。これらの動きは、芸術が意識変革や社会への影響力を持つ存在として、社会の中でますます重要視されている証ではないでしょうか。かつて特権階級のものであった芸術が一般に開かれ、また祭りのような特別な芸術から、日常に溶け込む芸術へとシフトしつつあるとも見ることができます。

その象徴的な事例として、本展では「kioku手芸館 たんす」(以下「たんす」)を紹介しました。「たんす」は2012年、大阪市の文化事業「Breaker Project」の一環として西成区にあるの元タンス店を活用して始まった創造活動の拠点であり、現在は公的機関の助成に頼らず自律的に運営されています。美術家・呉夏枝氏とのプロジェクトを皮切りに、数内美佐子氏や西尾美也氏といったアーティストたちと協働しながら活動を展開してきました。現在は週2回開かれており、近隣住民を中心に多様な人々が集まる場となっています。そこに集う人々は、単なる友人同士の集まりでも職場のような作業空間でもなく、それぞれのペースで創作活動に取り組んでいます。現在の主な活動は「NISHINARI YOSHIO」の衣類制作につながっていますが、参加者の能力や興味に応じて刺し子や端切れをつなぐ作業などが提案され、各自が無理のない範囲で活動を行っています。また、完成した洋服が販売されることで、参加者にとって単なるアートプロジェクトや作品への参加を超えた、現実の社会との接点が生み出されていることも重要な点といえるでしょう。

「たんす」の活動は、創作を通じて暮らしに静かに介入し、日々の生活の活力や社会との接点を生じさせています。それは新たな関係性や気づきを生む場となり、地域に根差したネットワークを形成するだけでなく、高齢者や在留外国人、さらにはそれらを支える支援者たちなど、普段交わることのない人々をつなぐ、ある種の社会福祉やソーシャルワークとしての役割を果たし始めています。本企画を通じて、「たんす」のような活動が、アートが実社会で担うことのできる重要な役割を示す一助となることを期待しています。そして何より、このような活動がさらに広がりを見せる未来を見てみたいと願っています。

(本展企画者 五十嵐純)

## あらかすいとなみ Vol.1 kioku手芸館「たんす」

会期：2024年11月29日(金)～2025年2月2日(日)

会場：佐賀大学美術館 小展示室・歴史展示スペース

主催：佐賀大学美術館

協力：東京藝術大学西尾美也研究室、佐賀大学大学院地域デザイン研究科 キュレーション演習クラス、

佐賀大学芸術地域デザイン学部 情報デザイン研究室、佐賀大学農学部 地域社会開発研究室

企画：五十嵐純(佐賀大学美術館)

## 記録集

2025年1月7日発行

企画・発行：佐賀大学美術館

編集・執筆：五十嵐純、松尾真由子・高岩みのり(一般社団法人 brk collective)、三浦麻衣、西尾美也

写真：斐生田兵吾、草本利枝 写真提供：Breaker Project

参照テキスト：

p5: Breaker Project Document Book 2011-2013, p15 / 2014-2015「場所」, p14-17

p6: <https://breakerproject.net/project/nishio-yoshinari.php>

デザイン：後藤大樹(Foot Print)

印刷・製本：大同印刷株式会社

佐賀大学美術館

〒840-8502 佐賀県佐賀市本庄町1

1 Honjomachi, Saga City, Saga, Japan 840-8502

TEL: 0952-28-8333

<https://museum.saga-u.ac.jp/>

あらかすいとなみ Vol.1

# kioku 手芸館 たんす

## Kioku Shugei-kan Tansu



佐賀大学美術館

SUAM

THE SAGA UNIVERSITY ART MUSEUM



### kioku手芸館「たんす」

大阪市西成区山王にある元タンス店を活用した創造活動拠点。大阪市の芸術文化振興事業として2003年に始動した「Breaker Project」の一環で2012年に開館。アーティストと地域住民が出会い、相互に影響を与え合いながら、共にものづくりに取り組む場として、地域に根ざした活動を展開してきた。2018年より、一般社団法人 brk collective が運営を行っている。地域住民を中心とした参加者が集まり「つくる」ことを軸とした様々な活動を行うほか、地域の女性たちの手仕事によるオリジナルプロダクトや美術家・西尾美也との共同制作によるファッションブランド「NISHINARI YOSHIO」の工房兼ショップとして週2日オープンしている。

### NISHINARI YOSHIO

美術家・西尾美也とkioku手芸館「たんす」に集まる地域の女性たちとの共同制作により2018年に立ち上げた西成発のファッションブランド。地域の女性たちによる予想を裏切るアレンジや発想の飛躍、西尾が考えるイメージとの齟齬など、予期せぬズレをコンセプトの一つに、作業着=日常を生きるための服を提案している。「NISHINARI YOSHIO」の商品は、「身近な人を想定し、その人への思いやりをデザインする」や「自分の人生を表す最後に着たい3着をデザインする」といった西尾からメンバーに出されるお題から生まれたもの。「たんす」に集まる不要になった生地を活用し、1点ごとに布遣いで制作していることも特徴のひとつである。2023年より地域に急速に増えつつあるベトナム人コミュニティと服づくりのワークショップを実施している。

### 一般社団法人 brk collective [ブレコ]

「たんす」を運営するブレコは、「Breaker Project」の事務局メンバーによって、これまでの経験と蓄積をさらに様々な地域で展開していこうと2015年7月に設立。芸術文化が人々の創造性をはぐくみ、多様な価値が共存する社会の再構築に不可欠であるという認識のもと、新しい表現活動を支える環境整備のほか、教育・福祉・まちづくり等、領域を超えた連携・協働のプラットフォーム形成に向けた事業や調査に取り組む。

モデル協力：須藤よし子、藤沢岳史、Giap Thi Bich Ngoc、Le Duc Vuong、Nguyen Thi My Duyen、Dao Thi Hong Vui、中田久江、福岡創大、Duong Thi Thanh Trang、Le Van Tien、長谷川亮徳、市川正士、Ta Thi Lan Anh

## NISHINARI YOSHIO 「最後の3着」

今回の企画展では「たんす」で現在取り組んでいる「NISHINARI YOSHIO」第二弾のお題「自分の人生を表す最後に着たい3着」の活動を紹介します。メンバーそれぞれがデザインしたプロトタイプと「たんす」に通う参加者をモデルにした写真を展示した。 テキスト：三浦麻衣 写真：菱生田兵吾



1



2



新谷若江 しんたに・そえ

1:花瓶のスカート アイデアスケッチを逆さにするとスカートに見えた。それは、20年も通うフラワーアレンジメント教室で使った、新谷さんの大切な花瓶を描いたスケッチだった。逆さに咲いた手づくりの花々はすでに200個以上。しかし「まだまだ足りない色がある」と語る新谷さんは、心を彩るかのように今日も花をつくり続けている。

2:クラゲ山のポンチョ 「忘れる方が楽だったの」。15歳年上の夫を亡くしたショックで彼の物はすべて捨ててしまった新谷さん。けれど一緒に山登りをしたときの帽子だけはどうしても捨てられなかった。その帽子のシルエットを元に型紙をつくり、クラゲのような形のポンチョをつかった。仲間にも腰やワッペンを手伝ってもらっていると、自然と夫との思い出を口にするのができた。忘れようとはばかりしていた記憶が、再び新谷さんの心にのびのびと泳ぎ始めた。



草田武子 くさだ・たけこ

3:刺繍糸収納柄のエプロン、スカート 自宅でお好み焼き屋をしていた武子さん。毎日使うエプロンはお腹の部分がすぐに汚れてしまうため、肩紐は残しつつ、何度も新しい生地を縫いかえて使っていた。ある日、他から火が燃え移り、長年住み続けたその場所が火事になってしまった。なんとか焼けずに残っていたのは、エプロンを縫うのに使っていた足踏みミシンと大事にしていたお手製の刺繍糸収納。武子さんの「刺繍糸収納柄のエプロン」はその2つの宝物を使ってつくった作品だ。

3



## 須藤よし子 すどう・よしこ



4:ピアノ発表会のためのドレス ずっとピアノを習いたかった須藤さん。やっと教室に通えたのは退職後の66歳。いつかはピアノの発表会に出てみたい。自分の黄緑のポロシャツをリメイクして、たっぷりのフリルが踊るドレスをつくった。毎日8時間、ひたすら編んで編んでやっと完成。「ピアノを練習する時間がすっかりなくなっちゃったわ」と可愛らしく笑った。



4

5:火花の作業着 夫からの最初のプレゼントはミシンだった。溶接工をしていた須藤さんの夫は、毎晩作業着にたくさんの小さな穴を開けて帰ってきた。日々あの手この手で直し続けていると、ミシンも刺繍もいつの間にか上達していた。今は「自由につくるのが楽しい」と話す須藤さん。白いキャンパスのようなジャケットに鮮やかなドットを刺繍で描いた「火花の作業着」は、まるで須藤さんの才能が弾ける火花のようだ。

6:ワープロパンツ 電車の中。膝の上にはいつも透明なワープロを乗せていた。40代、キャリアウーマンだった須藤さんは、若い部下に負けてはられないと必死にタイピングの練習をしていた。そんな努力家の須藤さんの指は、針に握りかえられ、難しい立体感まで見事に再現された「ワープロパンツ」を縫い上げてしまった。



5, 6

7



7

## 中田久江 なかた・ひさえ



7:初任給の子ども服 人生で初めてもらったお給料。その一部は自分の着物を縫うための布に使った。周囲の人は「もっと派手な布にすれば」と助言したが、中田さんはその色と柄をとて気に入っていた。それから結婚し、3人の子を育て上げ、誰かのためにつくることの喜びも知った中田さん。初任給で買った布の柄を70年越しに再現し、今度は子どものための服をつくった中田さんは、それを自分の最後の3着の1つに選んだ。

8:刺し子ポンチョ(青と赤) たんすに選んで始めて10年を越えた頃、新たに刺し子に挑戦した中田さん。朝と夜の時間に一針一針積み重ね、生活に溶け込む習慣のようにできあがっていった。襟まで刺し子が施された余白のなさは、ひたすら夢中になって手を進めた証とも言える。「無心になれる楽しい時間」と話す中田さんの人生のひとつきの軌跡のような作品だ。

8



8



9

## 松本壽壽子 まつもと・かずこ



9:目玉焼きセーター、スカート、パンツ 前を向いても後を向いても、1日はあつという間に過ぎていく。ならば明るく前向きに毎日を生きよう。ご病気をされた松本さんはそう決意した。すると偶然知り合いのお弁当屋さんから「明日から来てほしい!」と頼まれた。それから10年経つ今日もそのお弁当屋さんで、毎朝150個もの目玉焼きをつくり続けている。「目玉焼きシリーズ」は、そんな松本さんが着る人にバワフルな元気をくれる作品だ。

10:くさりアクセサリ 「イヤリングから服をつくりたい」。そんな松本さんのアイデアから生まれた作品。手編みのくさり(鎖)が耳から連なり、ベストのように体に寄り添っていく。しかし松本さんはまだ納得いかないようで、もっと全体を太くしてはどうか、もっと隙間を減らしてはどうか、もっとよくしたい、その思いから湧き上がる松本さんの発想は尽きることがない。



12

10

## 宮田君代 みやた・きみよ



12:自分エプロン 西成で15坪の魚屋を営んでいた宮田さん。毎日身につけていたエプロンを、歳を重ねた自分に合わせてリニューアル。最近よくごはんを落とすので前面の丈は広めに、そしてお手洗いでいちいち外さなくて済むよう背面に工夫を。失しがちなメガネを入れるためのゴム付きポケットと、後ろに手をまわさず前で結べる長めの紐にもこだわった。お店では地味な色のエプロンばかりだったので、今は遊び心を持って色と柄を選んだ。自分への服作りは、自分を見つめることなのだ宮田さんは作品を通じて教えてくれる。

11



11

## kioku手芸館「たんす」のこれまで

12年間の活動を経て、地域に根ざした拠点へと変化を遂げつつある今。日々のいとなみを通して起こる小さなできごとの蓄積から活動が深く育ってきているように感じます。ここでは、今につながるこれまでの活動を紹介します。

### 2012年12月15日 kioku手芸館「たんす」開館

美術家・呉夏枝による作品制作過程で、山王のデイケアセンターみどり苑で行っていた、地域の女性たちの語られることのない記憶を集めるリサーチとしてのワークショップ「編み物をほぐす/ほぐく」。活動をより地域に開くために、空き店舗だった元・鈴木タンス店を清掃・改装しオープン。家庭のタンスに眠る編み物を集め、約1年間、週2-3回のペースで、ほぐく作業と時間を共有しながら、地域の女性たちの居場所へと成長していった。



a b c d e f g h i j k l m  
a,b,c,d,e: 呉夏枝「光のけはい、ゆらめく影」活動風景、2011-2013、Breaker Project / photo: 草本利枝 f: 藪内美佐子「喫茶たんす〜雑音の界隈の鼻歌が雑音の彼方の鼻歌に変わるさま〜」活動風景、2014-2015、Breaker Project / photo: 草本利枝(h,i,j,k) h,i,j,k: 西尾美也「NISHINARI YOSHIO」活動風景、2016-2017、Breaker Project / photo: 草本利枝(h,i,j,k) l: photo: 草本利枝 m: photo: 藪内田兵吾

2014年4月 呉のプロジェクト終了後も「たんす」のワークショップ工房/展示ギャラリーの機能を残しつつ、「つくる」ことを軸にした創造活動拠点として、継続的に展開することに。



2014年6月 美術家・藪内美佐子によるプロジェクトが始動。「鳥に色を塗っておいね」「サラのポロ布」「黒いながめ」「毛深い姉妹」といった不可思議なタイトルがつけられた。編み物や縫い物、フロッタージュやコマ撮りアニメーションなどのワークショップを展開。さまざまなものづくりが連鎖し、地域の女性たちと藪内が、お互いに影響や刺激を与え合いながら、手芸とアートの領域を往來するユニークな場へと成熟していった。参加者たちは「なんでもやらせてもらいます!」と、初めての創作にも貪欲に挑戦し、これまで内に秘めていた各々の創造性を開花させる。約2年間の活動を経て、「たんす」が開館する日には必ず参加するコアメンバーが生まれる。

2016年11月 「たんす」の担い手へと変化を遂げつつあるコアメンバーとともに、美術家・西尾美也によるプロジェクトが始動。まずは「たんす」に通う地域の女性たちの「衣服」や「装い」に対する固定概念を崩すことを目的に6つのワークショップを実施。西尾が過去に行なったワークショップや作品制作をベースにお題が出された。ワークショップを通じて起こる、地域の女性たちによる予想を裏切るアレンジや発想の飛躍、西尾が考えるイメージとの組織など、予期せぬズレを面白がり、そこからさらにアイデアを更新していくといったプロセスを経て、ファッションブランド「NISHINARI YOSHIO」のコンセプトが生まれる。



2018年2月 約1年のワークショップ期間を経て、西尾と地域の女性たちとの共同制作によるファッションブランド「NISHINARI YOSHIO」が立ち上がる。地域の女性たち(作り手)のメンバーそれぞれが選んだ身近な知人をモデルに、彼・彼女らへの思いやりがデザインとして変換されたワークジャケット(作業着)を第一弾コレクションとして発表した。



2018年4月 大阪市の文化事業「Breaker Project」から独立し、一般社団法人 brk collective(ブレイク)が運営を引き継ぐ。「NISHINARI YOSHIO」の継続展開のほか、「たんす」に集まってくる毛糸や布などを使って、地域の女性たちの手仕事によるオリジナルプロダクトの開発・販売にも着手。地域に根ざした創造の場として自主運営の道を探り始める。

